

# 木村文助研究 No. 1

通 信 2000、6、20

「村の子供」のコピーから始まった

木下 寿実夫

木村文助の顔は、私の母校である大野小学校に校長の写真が掲げられていて微かな記憶があった。木村と綴り方指導、「赤い鳥」についてはずっと知らずにいた。

文保研活動に関わってから、確か会員の方からと思うが「村の子供」の事を知った。早速誰が持っているか調べ、本町の赤井千代さんの手にあることをつき止め、無理にお願いし「一週間で返す」ことを約束し借用した。

ぎっしり詰まった綴り方、木村の序文、読み切るのは後にして取り敢えず函館でコピーした。表紙が無いので困ったが、北海道教育史に「村の子供」の表紙が小さく載っていた。それを当時の社会教育課長坂爪さんに模写してもらった。それ以来資料収集は遅々としたものであった。

木村について北海道教育史の各巻に載り評価が高い。手元にある数少ない研究者の資料を見ても評価には頷ける。さて地元はどうかというと、大野町史の学校教育には記述が無く大正時代の青年活動の欄に載ってはいる。大野小の同窓会を核として地域づくりに当たったことで、一方の柱が抜けている。

消えようとしているものに早く光を当て再評価しなければ、またそれまでの挽回の意味も込め丁度1997年が「村の子供」発刊70年であり、本格的に活動を再開し講演会、資料展、「赤い鳥」復刻版購入と昨年まで続けてきたところであり、会報「ぶんぽけん」、町政要覧、広報、あるいは新聞等で情報化されていて詳細は省く。

今回秋田から「北海道の児童綴り方名作選」が届き、本来大野で作るべきもので、恐縮すると共に感謝である。京都から「北海道教育史の研究—木村文助の場合—」が届き、一層活動に弾みが付こうというもの。

仏教大学岡屋先生は10数年前大野に入り調査したという。もう一度入りたいと。情報収集が進み、ネットワークづくりに結び付けたい展望もある。

木村文助に関心のある方の情報交換の場としてこの通信「木村文助研究」が活用されれば幸いである。

「赤い鳥」に載った大野の綴り方は「北海道の児童綴り方名作選」に入っている  
ので紹介する。

[題名]	[高は高等科 尋は尋常科]	[「赤い鳥」掲載号年月]
1922年		
橋 (賞)	高1 新栄 とよ	大正11年 8月号
兄の病氣	2 釣谷 くに	9
右の手	2 川口 良子	10
1923年		
母の死	1 為国 はる	12 1
酒のみ	1 村本 金彌	4
妹の靴	1 寺田 ちよ	6
柿盗人 (賞)	2 中村 とく	11
1924年		
夜廻 (賞)	1 金川 つわ	13 1
母 (賞)	1 大村 いち	1
稲刈	2 田島 たき	2
栗盗人 (賞)	1 西谷 <sup>き</sup> くゑ	3
父ちや	2 安保 さき	5
身代りの金 (賞)	2 田島 たき	6
寺まゐり (賞)	尋2 木村 たれ	7
銭 (賞)	高2 西谷 <sup>き</sup> くゑ	7
おひる (賞)	尋2 田山 みつ	8
焼場の爺さん (賞)	高2 金川 つわ	9
*以後賞を推奨と佳作に分けて		
せみ (推奨)	尋2 中谷 富彦	10
酔っぱらひ (推奨)	高2 若松 きよ	11
母	1 高田 むめ	12
1925年		
支那人 (推奨)	尋3 田山 みつ	14 1
父 (推奨)	高2 若松 きよ	3
○第二次入選記念写真載る		4
母のかへり	1 小林 れん	5
乞食 (佳作)	1 吉田 みつ	5
◇名作選では題名変更		
歸った兄の話 (推奨)	2 若松 きよ	7
しかられて	尋4 田山 みつ	8
さけのみ (佳作)	4 小笠原 みち	9
まる一のお母さん (推奨)	高2 松原 とよ	10
1926年		
食ぱん	尋6 金川 重雄	15 1
*「村の子供」の巻頭に載ったので「北海道教育史」に紹介される		
父の足 (佳作)	高2 高田 むめ	1
兄 (佳作)	1 中村 よしえ	2
馬鹿はっ子 (推奨)	尋5 吉田 孫七	3
豚の子	高1 影井 愛	3
どら猫 (推奨)	2 松原 とよ	4
死人 (推奨)	尋5 吉田 孫七	5
私のおもひ (推奨)	高2 斎藤 きえ	7
◇名作選に赤い鳥選評と文中の歌「浜千鳥」が載る		
馬車にひかれた子供 (佳作)	2 影井 愛	10

飲んだくれ (佳作)	2	影井 愛		1 1
ある婆さん (推奨)	尋6	吉田 孫七		1 2
*オマツリー低年読物一	教師	浪岡五十三		1 2
1927年				
犬の親	高1	松田 あつ	1 6	1
*雑誌は早く発刊されるので大正になっている				
納豆賣り (推奨)	尋5	田山 みつ	昭和 2	3
祖母 (推奨)	高2	北畠 千代		4
大工さん (推奨)	2	吉村 きみ		5
豚 (佳作)	1	岡村チヨノ		6
支那人の手品 (推奨)	2	池田 いね		7
*「綴方生活 村の子供」が1ページ全面広告載る				7
山の家 (推奨)	尋5	釜澤 みつ		8
私の足	6	牧野 はる		9
乞食 (佳作)	高2	吉田 きそ		1 0
◇名作選では題名変更				
馬鹿あんこ (佳作)	尋6	田山 みつ		1 1
子守のりさ (推奨)	高2	富谷 千代		1 2
*赤い鳥代表作集に載る				
1928年				
おぢいさん	尋6	斎藤百合子	3	1
火事 (佳作)	高1	新里すえ子		2
川流れ (佳作)	尋6	鈴木 君代		3
にはとり	高1	高田 ミセ		6
電話	2	濱田 サキ		7
裏の婆つちや (佳作)	1	丸山喜一郎		9
栗ひろひ (佳作)	2	池田 金圓		1 0
1929年				
子馬 (佳作)	尋6	富谷ルリ子	4	1
蟹	高1	牧野 はる		3
1936年				
*私への影響	戸井日新小校長	木村 文助	1 1	1 0 (最終号)

以上綴り方59編は木村文助が編した「村の子供」や「村落児童文選」にほとんど掲載されている。

◇名作選には現代仮名遣いに直している。全道105編中56編が載る。

.....

「赤い鳥」(鈴木三重吉主宰)

創刊 1918年・大正7年7月号

1923年・大正12年10月号、12月号は関東大震災で休刊

1929年・昭和4年3月号を発行して休刊

1931年・昭和6年1月号より復刊

終刊 1936年・昭和11年10月号(鈴木三重吉追悼号)

綴り方は鈴木自らが全国から集まった毎月数百~約二千点の中から十点ほど選び批評を丁寧に書いた。自由画は山本鼎が選び批評を書いた。

自由画には35点が入選した。

大野町郷土資料室には「赤い鳥」復刻版195冊と解説書、関連の図書、木村文助の資料も若干あり閲覧できる。

『村の子供』に載った作（「赤い鳥」に載ったのは除く）

（著者木村文助 文園社 昭和2年4月 定価70銭）

田圃	高2	富谷	千代	弟	高2	清水	きみ
魂	2	村本	スエ	算術から	2	清川	きつ
手紙出しに	2	女	スエ	畫火事	1	金川	つわ
私の病氣	2	斎藤	キエ	青物賣	1	安保	つさ
哀れな兄弟	2	女	京	鼠 人	2	横阜	さき
手品遣	1	斎藤	京	雇 人	1	斎藤	千代
病送り	2	坂本	シナ	「たきゑ」	2	川口	ノ
千重子さん	尋6	谷口	三重	埃 焼	1	田山	よし
さき子の父	高2	村本	スエ	盲目の姉	2	女	さき
化物の話	1	樋口	タツ	涙	2	葉	祐
五圓札	1	女	リ	魂消た婆さん	尋4	千吉	恭
百日咳	1	野田	エ	魂消た婆さん	6	吉田	七
雪落し	1	池田	わか	救	6	吉伏	七
花田の弟	1	小林	れん	川流れ	2	山崎	み
隣のお父さん	1	村本	スエ	おどり	3	小笠	エ
宿った乞食	1	村本	スエ	「婆ちや」	3	釜澤	ツ
冬の夜	1	松原	かつ	すゞめ	3	松田	み
酒賣	1	松原	ト	日曜日	5	小杉	あ
唾の爺さん	2	松田	アイ	夕マシ	1	小牧	門
だいしとり	2	石島	タキ	へび	2	田野	は
砂糖	2	西谷	キ	あづき	2	田野	みつ
此間の手紙	2	若松	き	「かね」	5	千	せ
餅搗	1	女	せい	半 鐘	1		昌
犬の子	2	金丸	せい				之

\*

『村落児童文選』に載った作（「赤い鳥」に載ったのは除く）

（著者木村文助 文園社 昭和5年4月 定価35銭）

へら	尋1	西川	惣一	夢	高2	富谷	千代
うちのこども	1	利谷	悦子	遠足の朝	2	野田	リエ
まさのりさん	2	加藤	重矩	かくれんぼ	2	池田	いね
子ねこ	2	富谷	清志	トランプ	2	中野	武義
しんだばばちゃん	2	村本	ソノ	狂 氣	2	岡本	せい
マント	2	斎藤	リエ	大沼行	2	岡本	チ
祖父	5	中村	かん	友さんの足	2	富米	テ
津波嫁	6	吉田	孫七	父の借り	2	新里	正
八と管	高1	吉村	キ	米の救命	2	丸山	す
鐵人の正體	1	女	あ	神運の思	2	池田	喜
弟の怪我	1	松田	あ	兄の思	2	島田	マ
茂吉	1	立花	ト	下駄	2	島田	マ
火の玉	1	金川	つ	茅くばり	2	斎藤	ま
時計	2	姥澤	ち		2	成	キ

\*

仏教大学岡屋昭雄先生が昨年広島大学教育学部国語教育学会で発表した資料をいただき若干紹介する。

### 「北海道国語教育史の研究－木村文助－の場合」

はじめに

「焼き場の爺さん」や「母」が「赤い鳥」前期の綴り方を代表する動向を作り出す力になったと引用。

#### 1、木村文助の綴り方作品の特質

「焼き場…」と「母」の全文と（鈴木三重吉）と（木村文助）の批評もそれぞれ載っていて考えの違いが存在している。

#### 2、「赤い鳥」綴り方との決別

木村の論文では文学者鈴木三重吉と教育者との立場の違いは自然的な相違として指摘している。

#### 3、文助の綴り方の本質を求めて

木村文助が突如砂原小学校転動になった経緯が詳細に載った新聞記事。また教えを受けた赤井千代さんの証言も紹介している。

おわりに

今回は木村文助の綴り方の本質について論究し今後も解明したと結んでいる。

参考文献

滑川道夫『日本作文綴り方教育史3 昭和編』（国土社 1983年）

木村文助『綴り方生活 村の子供』（文園社 1927年）

「綴り方生活12月号〈第7巻第10号〉」（文園社 昭和12年）

中内敏夫『生活綴り方』（国土社 1982年）

（別資料）「木村文助の綴り方教育について」

木村著書2冊『綴り方生活 村の子供』、『村の綴り方』の発刊に寄せて鈴木の序文が載っている。

『赤い鳥』創刊の意図、大野校の方言と標準語との関連、綴り方を伸ばすには教師の力と述べている。



方言豊かな文集

未永く残したい

無職 木下寿実夫

(渡島管内大野町・63歳)

先日、秋田県の方から「北海道の児童綴り(つづり)方名作選」が届けられた。

大正から昭和初期にかけて、東京で発行された児童文芸月刊雑誌「赤い鳥」には、入選した全

国の子供たちの綴り方が載り、日本中から注目された。

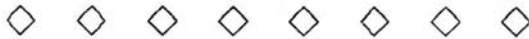
名作選には道内からの「赤い

鳥」入選作百五編が載っていて、そのうち五十八編が私の母校である大野尋常高等小学校のもの

だ。表現が豊かで方言が多く、当時の生活文化がにじみ出ている文ばかり。まとめた方へ感謝し、うれしい限りである。

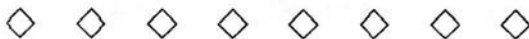
「二十一世紀へ残したい方言」と、最近によく言われるが、当時の学校では一般的に標準語で書くことを求め、方言を卑しんでいたようだ。「赤い鳥」主宰の鈴木三重吉は、方言を入れてもよいとし、素直に書かれた文を入選させた。これに共鳴した木村文助校長は、教師と共に子供たちに綴り方を指導し次々入選させた。

二十一世紀へとつなげる方言の入った綴り方がよみがえり、郷土にいつまでも残したい貴重な一冊を頂いた思いがする。



〈新聞掲載〉

- ・「北海道の児童綴り方名作選」…函新
- ・「北海道の児童綴り方名作選」…道新投稿

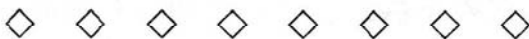


〈届いた資料・図書〉

- 東京よりFAX；広島大学国語学会で「木村文助」研究が発表されたとの情報。
- 資料；北海道国語教育史の研究－木村文助の場合－ 京都仏教大学岡屋氏 (6ページと3ページ)

○図書；「北海道の児童綴り方名作選」224ページ 1000円

著者 久米道彦



〈礼状・資料送付〉

- 広島大学図書館、仏教大学岡屋氏、秋田県久米氏

発行 041-1201 北海道亀田郡大野町本町68 木下 寿実夫

町文化財保護研究会会員 町文化財保護審議会委員 道文化財保護協会会員